

研究調査への ブレイク

地方気象官署の技術者へ

島山久尚*

1. 地方気象官署の技術者に

これは、気象庁の地方官署に在勤の技術者を対象にして書いている。こういう所の人たちはそれぞれ日常業務を受持っているのだが、それをやり過ぎていさえすれば、それでいいというものではない。自分で研究調査をやった経験が、日常業務を行なう上にも大いに参考になるし、また助けにもなるものである。筆者は、地方官署勤務の技術者が、日常業務の余暇に研究調査をされることを勧めるものである。

2. 研究題目の選び方

研究調査を行なうのに二つの場合があると思う。一つは複数の官署の共同研究あるいは一つの官署内の複数の技術者の共同研究に協力する場合であり、他は全くの個人的な研究の場合である。前者の場合は、研究題目の選定等に関しては格別自分で頭を痛めることはないであろうが、後者の場合にはまず研究題目の選定から始めねばならない。

研究題目としては、その土地にふさわしい地方的なものを選ぶのがよい。こういう問題は地方ごとにまだまだたくさん、手を着けられないままに残っていることと思う。また、かつて先人が一度調べたことがあっても、進歩した最近の気象学や気象技術に照らして説明をし直すことができることもあるだろう。日常業務をやっているということで、研究題目も捉えやすいはずである。観測や統計に関係したことでなく予報関係について考えてみれば、予報指針のある項目が外れやすいなどというのはいくらも研究題目になるはずである。

地方ごとの天気のことわざ等もいい研究題目になると思う。天気のことわざは大別して次の三つに分類することができる。

1. でたらめなもの
2. 中緯度ならば地球上どこでも通用するもの
3. 局地的な狭い地域にだけ通用するもの

第3分類の局地的な意味のものは、広く流通する書物の中に掲載する意味が薄いとして、気象の専門書にも解説書にも無視されることが多かった。しかし筆者は、こ

の第3分類の局地的なものがおもしろいと思う。近ごろの気象学の専門雑誌を見ると、山越え気流などの論文が時に眼につくが、これは複雑な計算を伴うため、昔は捨てて省みられなかったものである。この方面にも電子計算機を駆使できるようになって、その研究に着手されたわけである。第3分類の天気のことわざも、この種の研究と関連させていくと、それが局地気象学そのものにはね返って進歩を促す場合もあると思う。

3. 研究調査を始める時

だいたいこういう事について調べてみたいという見当がつかいたら、次にやるべきことは二つある。第1は文献調査である。先人がその問題をどこまで究め尽しているか、あるいは全然研究されていないかが、これでわかる。それともう一つは先輩の意見を聞いてみることである。地方官署などでは、ある時期に手数をかけて調査をし、かなりの程度の成果を挙げたが、研究論文や調査報告の形で人前に出すにはまだ不十分だし欠点もあるということで、印刷物の形になっていないで、その結果がただ口頭でその官署に伝承されているというものがあるらしいから、こういうことを言うのである。

地方官署では日常業務が主で、研究調査はあくまで副なのだから、職場の先輩である課長や官署長が、研究調査を重んじこれを奨励する空気を作ることが必要である。本誌のこのシリーズの前の文で内田英治（1978年8月号）がムードづくりなどと書いたのは、このことではないかと思う。それと若い技術者としては、必ず経験の豊かな課長や官署長の指導を受けるようにすることである。要するに職場における人間関係を良好な状態に保つよう、お互いに充分な配慮をすることが必要である。

4. 研究調査の結果

研究調査はそれからそれへと糸を引いて結末のないのが普通なのであるが、途中で一応の成果を得て一段落という時はある。こういう段階まで来たら、研究会で発表をして、同学の研究者たちの批判を受けることが必要である。そしてそれを印刷物にして、後進の人たちが誰でも利用できるような形にして残すように心掛けることである。

* H. Hatakeyama, 二松学舎大学